四国新聞　令和８年５月７日（木）

香川の歴史を地理から解読

高松の泉保さん 論文まとめ出版

讃岐国府の位置など再考

歴史地理の視点から、郷土を見直す本を出版した泉保さん
＝高松市番町、四国新聞社

元公務員で香川地理学会理事の泉保安夫さん(74)＝高松市鬼無町＝が、これまでの論文をまとめた「歴史地理学はこんなにおもしろい～讃岐・阿波の歴史を読みなおす」を出版した。

泉保さんは子どもの頃から地図を眺めるのが好きで、社会人になってからは地図に描かれた地形を読み解き、現在地やルートを判断する登山にも没頭。退職後は自宅近くに勝賀城跡があったことから郷土史にも興味を持ち、総合的に歴史を考える歴史地理学に傾倒した。

書籍では、坂出市府中町にあったと特定されている「讃岐国府」について、国司として赴任した菅原道真の漢詩集「菅家文草」から位置を再考。例えば「冬の朝、開法寺から梵鐘(ぼんしょう)の音が聞こえ驚いた」という漢詩から、「府中町に国府があれば、すぐ近くの開法寺の鐘の音は普通に聞こえるはず。実際は、普段は山に阻まれて鐘の音は聞こえないが、冬季の放射冷却現象に伴う上空の空気層に反射して聞こえたのでは」と考え、国府は当初、高松市国分寺町の関の池付近にあったのではないかという新説を提示した。同論文は、東京都板橋区の桜井徳太郎賞奨励賞を受賞した。

また、中世には屋島から現在の高松市街地にかけて、引き潮の時だけ渡れる沿岸州「海の中道」があり、長宗我部元親も讃岐攻めの際に歩いていることを指摘。ほかに中世勝賀城と笠居郷、阿野郡（現在の高松市国分寺町～坂出市東部付近）の条里遺構などについて、計六つの論文を掲載している。

泉保さんは「先入観を持たず自由な立場で考えたいと心がけて研究を行ってきた。郷土史や歴史地理学に興味がある人はもちろん、香川の地に暮らす全ての人に読んでほしい」と話している。

B5判、164ページ。2750円。宮脇書店の主な店舗で販売している。問い合わせは泉保さん〈tonio kreger2011@gmail.com〉。